

加齢で自律神経の活動低下

「フレイル」予防を研究

ファンケルと健康長寿目指す 弘大が講座

共同研究講座「フレイル予防学研究講座」の設置開式を行った弘大、ファンケルの関係者



近年注目を集める、加齢により身体機能や認知機能の低下が衰え要介護の一步手前となる状態「フレイル」。弘前大学と、化粧品・健康食品大手のファンケル（横浜市）は、フレイルに陥る原因と予防方法を明らかにすることを目指し、今月から共同研究講座をスタートさせた。研究期間は3年間。

フレイルは、高齢化原因と言われる運動機能・認知機能の二つが低下し、要介護状態の予兆状態に陥る。活動力の低下が大きな関わりを持つ重要な課題。その対策を、今回の

共同研究では、活力低下による最終的にフレイルにつながる点がある。背景には、一般的に「フレイル」を指す「フレイル」予防学研究講座は、弘大の中路重之特任教授ら8人で構成。29日に弘大で講座の設置開

式が行われ、ファンケルの炭田康史取締役執行役員総合研究所長は「弘大COIの健康ビッグデータはこの研究において大変有意義。本取り組みで得られた成果は、健康長寿実現のため、新しい概念の商品、サービスづくりに生かしたい」と意気込みを語った。弘大大学院の若林孝一医学研究科長は「疾

病の一つ前の段階である化社会の喫緊の課題でつなげていく取り組みは非常に重要」と述べ、病の予防、健康増進にた。